

この書物に書かれていない

ヨハネによる福音 20:19-31

その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。

「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、

「あなたがたに平和があるように」と言われた。それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」

このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさったが、それはこの書物に書かれていない。これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名に

より命を受けるためである。

説教

復活節の第二主日（神のいつくしみの主日）は毎年同じ個所の福音を聴きいています。セカンドチャーチの礼拝説教も何回目かになります。奇をてらうわけではないのですが、今回は「この書物に書かれていない」（ヨハネ20章30節）を考えてみようとおもいます。

わたしたちの教会では礼拝のはじめにこう唱えます。

弟子たちの中に立ち、復活のみ姿を現されたように、わたしたちのうちにもお臨みください。

これはきょうの福音個所の冒頭部分からの引用です。

その日、すなわち週の初めの日の夕方（ユダヤ歴なので日曜日になります）弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち「あなたがたに平和があるように」と言われた。ヨハネ20：19

復活のイエスさまをお迎えしたいという願いをこめた祈りとして礼拝の冒頭に唱えているということになります。

このことに問題があるとは思いませんが、それだけじゃ足りないのかな、と疑問が浮かびました。それはきょうの福音のおしまいに記されている30-31節のみことばがあるからです。

このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさったが、それはこの書物には書かれていない。これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアだと信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。ヨハネ20：30-31

ここで「この書物」といっているのはヨハネ福音書のことを指しているだけなのか、聖書全体を指しているのか、解釈はそれぞれありますが「それはこの書物には書かれていない」を素直に文面から聴けば「書物＝聖書」の否定と読む

ことができます。否定とはいいすぎで、正確には 31 節にある書物の目的

(1) イエスは神の子メシアである

(2) イエスの名により命を受けるため

この二つの目的のために記されたということになります。

しかし、30 節には「この書物には書かれていない」とはっきり書いています。

いったいどっちの意味を読み取ればいいのでしょうか。

さて、29 節でイエスは見なければ信じないとだだを言うトマスを諭します。

わたしを、見たから信じるのか。見ないのに信じる人は、幸いである。 ヨハネ 20 : 29

さっきの 30 節 31 節を踏まえて、このみことばをこう聞くこともできるかもしれません。

聖書を読んだから信じるのか、読まずに信じる人は幸いである。

セカンドチャーチは毎週、日曜日に主日礼拝をおこなっています。しかし、それだけやっていれば救われるのかというと、そうではないでしょう。きょうのみことばを漫然と礼拝をおこなうことへの警告と受け止めることもできます。

礼拝するから信じるのか、礼拝せずに信じる人は幸いである。

こう読み替えも可能です。

儀式、儀礼はとかく形式的になりがちです。ふつうのことばでいえば、心を込めて礼拝をしなければいけない、となります。この「心を込めて」礼拝することの裏側になにか爆発的な力、礼拝をも解体してしまうような力が込められているような感じがします。ヨハネ福音書は結びに大きなしかけが仕組まれています。